

平成 24 年度 農村環境の未来を考える研修会



大会プログラム

2012.11.15 (木) 13:30~16:00
山口県総合保健会館 2F 多目的ホール

開会行事 (13:30~13:45)

基調講演 (13:45~14:30)

「水土里ネット那須野ヶ原のエネルギー政策」

～米と電気は自分で創りたい～

栃木県那須塩原市

那須野ヶ原土地改良区連合 参事

星野 恵美子

パネルディスカッション (14:45~16:00)

地域の^{おたから}資源を活かしてみませんか!

コーディネーター

山口大学農学部 教授

深田 三夫

パネリスト

那須野ヶ原土地改良区連合 参事

星野 恵美子

山口新聞 本部副本部長

宮本 邦彦

山口県立大学看護栄養学部 教授

人見 英里

山口県商工会連合会 専務理事

西村 克己

山口県地域消費者団体連絡協議会

名和田 伴江



栃木県那須塩原市 那須野ヶ原土地改良区連合 参事

(ダム水路主任技術者)



栃木県那須塩原市出身

1979年 那須野ヶ原土地改良区連合 事務局長に就任
2012年 那須野ヶ原土地改良区連合 参事 現在に至る
福島県新エネルギー詳細ビジョン策定委員会 委員
栃木県農政審議会 委員
農林水産省農村整備対策指針検討委員会 委員 など歴任

～ 私からのメッセージ ～

- 1 農村地域の最大の役割は、国民の命をつなぐ食糧確保が柱となる。**やがて間違いなくやってくるであろう世界的な食糧危機に、国民交えて最善の対策を講じておく必要がある。「食料(そもそも法律の制定にあたり、食糧とせず食料としたこと事態に国の危機意識が感じられない。食料は国民の餌ではなく、命の糧としての食糧である。)農業・農村基本法制定の最大の目的は、国民すべての命をつなぐ食糧確保(自給率アップ)と安心・安全の確実な保障である。
- 2 都市と農村の交流に期待するところ非常に大きい。**しかし、農村を都市に近付けていくための交通網の整備はベターとは言えない。インターネットの導入など情報網の整備に期待するも、道路や空港などの整備が農村地域の各地に展開された様を想像したとき、それぞれの地域の独自性や特色が薄れ“金太郎アメ現象”が起こり兼ねない。日本の素晴らしい観光資源・文化遺産は、農業的基盤、農村的風景が背景にあり存立している。観光名所の多くが農業と農村の風景に支えられて、日本の文化と観光資源がある。農業生産活動を通じて生じる国土の保全、水源涵養、良好な景観の形成、文化の伝承など、農村の多面的機能の重要性を再認識しなければならない。農村地域が真の魅力を醸し出していれば人はそこに集まる。立派なコンサートホールも劇場も必要としない。自然をどう生かすかということだ。効率の不明確な投資を前提とするより、今ある資源を少しだけ手直しし、各地の特殊性を活かす。環境破壊は、人間が自分の目先の欲望のために作り出したもの。
- 3 農村の活性化が図られない最も大きな要因は少子化現象。**都市も元気が無く、農村に限ったことではない。多くの人々は「農業には夢も希望もないと言う。」誰のための農業なのか。組織を動かすのは人。活性化の根底も人。人間資源説に基づいた担い手教育が必要。
- 4 昔、何処にでも存在していた集落間のつながり「ゆい」と言う習慣あった。**子供たちが悪さをすれば、家の子であれ、隣の子であれ、何処の子に関わらず叱ってきた。子は集落の宝だったのである。非行に走る子供は集落全体の恥に結びついていた。今、叱った子供からどんな仕返しが有るかわからない時代になったが、そもそも集落間のつながりが崩壊してきたことが大きな原因にあるように思う。助け合いの精神を排除しては、農としての産業も人の暮らしもなりたたない。

那須野ヶ原土地改良区連合の設立背景と活動理念

受益面積 4,323h a 組合員数 3,382 人

昭和42年に着工した国営事業に参加した土地改良区は10土地改良区であった。地域農業の発展に期することを目的として、それぞれの土地改良区の利害調整と事業によって造成整備された土地改良区施設の管理を適切に行い、水の有効利用を図るために土地改良区連合を組織し、設立許可された。その後、国営事業の完了に伴い、当連合が土地改良施設の管理委託を受け、施設管理・水管理にあたっている。

那須野ヶ原用水と森のしくみを伝え、那須野ヶ原の豊かな森、用水、田んぼが私たちの生活を支えていることを理解してもらうために、視察を受け入れ、積極的に自然エネルギーの開発支援に取り組み、水辺環境支援事業や未来を担う子どもたちに食の大切さを伝えている。歴史的な伝統文化の保存に貢献するための農作業体験活動も支援し、地域の価値を大切に継承する活動も行ってきた。

「水を求め、水を大切にす」ことからはじまった歴史的背景を継承するとともに、水や環境保全に対する意識を啓発し、農村と都市・人間と自然の共生を図り、自分たちの手でこの地域の未来を創っていこうという活動理念である。

那須野ヶ原土地改良区連合の受賞実績

- 2005年5月 「日本水大賞」にて農林水産大臣賞受賞
- 2006年2月 オーライ！ニッポン全国大会において「疏水百選」に認定
- 2009年2月 環境大臣より「水のエネルギー賞」を受賞
- 2009年6月 経済産業省より「新エネルギー百選」に認定

環境にやさしいエネルギー利用へ

那須野ヶ原発電所は、国営土地改良事業として全国で初めて計画設置（平成4年6月）されたもので、戸田調整池に流入する戸田東用水路の遊休落差を利用して最大340kWの発電を行う水力発電施設である。ここで作られた電力は、東京電力の送・配電線を利用して地区内の土地改良施設に供給され、維持管理費の軽減を図ることとしている。また、当発電所は「RPS法（電気事業者による新エネルギー等の利用に関する特別措置法）」に基づく新エネルギー等発電施設の認定を経済産業省より受けており、環境に優しいエネルギー利用に貢献している。



発電所外観



発電機



小水力発電施設とLED照明



山口大学 農学部教授



昭和25年生まれ 島根県安来市出身

【専門分野】 農地保全学 農業水利学

【研究テーマ】

- ①竹炭などを用いた農地からの流出濁水の除去方法
- ②地下かんがいシステム圃場における水分および養分の移動
- ③水路の生態系復元における水理要因の解析

ホタルや農業用水路などに生息する生き物の調査を通して、水、底質、水路の物理環境が生物の生息に及ぼす影響について調べ、生き物の共存した水路の整備を目指す。

山口県公共事業再評価委員会 委員

山口県農業農村整備事業環境情報協議会 委員

「農村」への想い

「農村の資源おたからを活用しよう！」が今回のテーマです。

私は大学の教育現場から出たことがなくこの場で語る資格はないのかもしれませんが、農家の長男として二十歳過ぎまで農村で暮らし、おりおりの農作業を手伝い、山や川で遊び、まむしにかまれ、蜂に襲撃されて顔が変形したり、がけから落ちて大けがをしたり、近所のおじさんに叱られたり、親父の愚痴を聞いたりしてきたので、そう現実離れしていないと思います。

教育の現場から感じた私の農村や農業への想いを5つのキーワードで示し、関連するものを私の日記から抜粋しました。

1. インプットとアウトプットだけの教育やイベントが多い

(その1)

学生約45名を連れて、市内の農村集落排水施設を見学しました。

視聴覚機器を使って教室で一所懸命に説明しても理解できないこともあり、「あっ、な一るほど」と百聞は一見に如かず。農村集落排水事業は農村部の下水処理ですが、処理過程で生産された汚泥を肥料にしたりして資源のリサイクルをはかっています。一次処理の部分では、台所から出てきた生ゴミなどがまだ原形をとどめており、においもひどく、これを覗いた多くの学生は「おえー」と言いながら目を背けて足早に通り過ぎていきました。

昔の農家では、毎日のトイレでの排泄物は肥溜めにたまり、やがてそれが畑にまかれました。また、台所からでてくる生ゴミもゴミだめに集められ、悪臭を放ちながら腐敗していきやがては土になっていきました。どこの農家の家屋の周りにでもまた畑でも、いつでも生ゴミや尿尿のにおいがしていたような記憶があります。

このように、人が出したものの目を背けたくなる部分から、有効に利用される過程までをつ

ぶさにながめてきたのですが、今の生活ではインプットとアウトプットだけを知るのみです。自分が出したものがどのようになっていくのか、目を背けたくなる部分も含めてその一部始終を一度は覗いてみることは大事なことです。



(その2)

研究室の学生に私が管理している畑を自由に使うように言っていますが、植えっぱなしでそれっきりという学生もいれば、毎日、朝夕、講義に行く途中や終わった後に立ち寄っては世話を続ける学生もいます。

当然の事ですが、世話を続けた区画は、病気や害虫は完全に防げないものの、収穫を間近に控えるほどに成長しました。私たちが毎日口にするもの何でもいいから”種や苗の段階から収穫まで”自分で育ててほしいとの思いから学生に勧めたものです。

この数年のことですが、”食農教育”という言葉がはやり、総合教育のなかでも取り入れられ、農家の水田や畑を借りて稲や野菜を栽培するといった学校も増えています。

また、一般市民が年間3、4万円を払ってオーナーとなって稲を栽培すると言った棚田のオーナー制などもあります。子供達の夏休みや収穫の秋になると様々な農業体験教室や催し物があり親子でにぎわいます。

これらの取り組みに共通しているのは、”栽培”あるいは”育”というプロセスをできるだけ省いて、”収穫”の体験だけをさせるということです。いわばいいとこだけの”つまみ食い”です。

企画する側には、私が研究室の学生に望むように、”最初から最後まで世話をしてほしい”とう意図があったとしても時間の都合上、現実そうはいかないことも多いと思います。

栽培という世話はいったい誰がするかと言えば、企画した当事者だったり土地の持ち主である農家だったりするわけです。あらためて”食農教育”と言われなくても、どこの学校でも昔からやっていたことです。例えば近くの小学校では生徒一人一人が鉢にトマトを育てていました。生徒は毎日水やりをしたり、脇芽をかいたりして世話をするわけです。結果はともかく世話をするというプロセスこそ大事だと思うのですが。

2. 基盤整備と機械化でどれだけ農家がすくわれたか

1区画 1.5 反の田んぼを2枚、3反(=30 アール)の田んぼの田植えを手伝いました。

手押しの4条植の田植機ですが、一人で2時間半ほどで終わりました。

この田んぼを昔のように、手植えをしたらいったいどのくらい時間がかかるだろうかと父に聞きました。「一区画を家族3人でするとして、たっぷり1日はかかるだろう」という返事。つまり田植機で2時間ほどで終わった田んぼが、手植えだと3人でまる2日はかかる計算です。一人で田植えをするとして、一日 10 時間の労働とすれば、6日間、60 時間という計算になります。

さらに、「それだけではすまない、苗代(なわしろ)から苗を準備するのに、3人で丸一日かかる」という返事。つまり、田植機という小さい農業機械のおかげで、労働時間は 1/30 から 1/40 に短縮できたわけです。「一日中、腰を曲げているのだから大変だった。よく体がもったもんだ」。いまはとも一日 10 時間、6日間も手植えなんてできません。

麦や菜種やレンゲも作らなくなったという話に及んでは、「とにかく年中働かずくめだった。やっと稲刈りの時期がやってきたかと思うと、まだ稲が田んぼにあるうちにレンゲの種をまき、春先にレンゲを刈っては耕起のときに一緒にすき込む」という話。

機械が普及するまでは、農家のひとが休めるのは、田んぼが雪に覆われた時くらいだった

ようです。きょう田植えをした田んぼも、昭和 40 年代の半ばに区画整理して 10 ほどの小さな田んぼを一緒にしたものです。

田植機を押しながら、棚田の風景を思い出しました。

ひとはあの曲線美がいいと言います。家族総出で棚田で田植えをしている風景は確かに絵になるでしょう。小型の機械が入ったとしてもいったいどれだけの時間がかかるでしょうか。「曲線がいい、などと言う前に自分で田んぼに入って田植えしろ」と独り言。

さらに、人が入らなくなると雑木が伸び放題のそばの山が目に入りました。里山ブームだそうですが、かつての農村風景がどんなに多くの農家のひとの重労働に支えられたものだったのかを言う人は少ないですが、そのことに思いを馳せないといけなんでしょう。

3. 子供の情緒や感性を形成するのは農村

徳島での工学系の学会講演会でのこと。

「私はこのようなことが専門ではないし、もう 10 年前にやったことなのですが、いまになって学会から要請があり、きょう講演することになりました」とS氏。「今は、特に都会の人の田舎志向、自然志向で農業体験教室などにはたくさんの親子連れでにぎわいますよ」と私が言ったら、「それよりもっとおもしろい体験教室がありますよ」とS氏。「山ですか？ 川ですか？」と私。「いいえ、ため池を干すんですよ。実際に私たちはある町内で何度かしましたが、みんな夢中でしたよ」。

その話を聞きながら、子供の頃の池干しを思い出しました。

農業用のため池は”つつみ”と呼んでいましたが、ふだんは危ないからと近づくのも許されず、また見た目にもドス黒い水を満々と溜め、何かがでてきそうな不気味さでした。

しかし、数年に一度は町内総出で泥さらえがあり、子供も参加が許されました。

斜樋の栓を抜いていって水がなくなり、次第にため池の底が現れてきますが、ふだん川では見たことのない巨大なフナや小さなウナギほどのドジョウが泥の中をはね回っていました。

今でもはっきりと覚えているのは、捕まえるのに大人数人で手こずった巨大な雷魚でした。

S氏によるとこの雷魚は今でも見かけるとのことですが、稚魚の段階でブラックバスにやられてしまい激減したそうです。白身で美味で農村の貴重なタンパク源でしたが、もう何十年もみたことがありません。

かつてため池では実に多様な生き物が生活しており、魚だけでも 10 種以上棲んでいたとのことですが、今はブラックバスが占有しているか、いなくても種類が少なくなりました。

山口はため池が多く、大学の中にも何カ所かありますが干してどろさらえをしたと聞いたことはありません。ひょっとしたら巨大な池の主が現れるかもしれません。(最近このため池の改修のため水を抜きました。40cm 超のブラックバス 1 匹と 30cm 級のコイ、フナが 20 数匹いました)



4. 農山村の再生の鍵はひとの動き

鳥取大学まで往復しました。岡山を過ぎ、山陽線の上郡から第三セクターの智頭線に入るルートを通りました。中国山地を抜けて日本海にでるのですが、ちょうど紅葉が見頃とあって車窓風景を堪能しました。

農家の庭先にたわわに赤い実をつけた柿の大木、見事な杉林、岩を砕く清流など、目の前広がる風景は、まさに原田泰治の絵の世界で、子供の頃の里山風景を思い出さずにはいら

れませんでした。

一見するとあの絵となんら変わらない風景でしたが、しばらくながめているうちに、「いや、やっぱり何かが違うぞ、昔の風景ではないぞ」と思うようになりました。隅々まで舗装された道路と行き交う車、整然と区画整備されたほ場などは、昔にはなかった風景ですが、もっと決定的な違いがあるということに気が付きました。

それは、大人や子供達の人々の存在とその動きや流れに決定的な違いがあるのです。

違いというより人がいないのです。この時期刈り取りが終わった田んぼとはいえ、裏作の準備や畑仕事に人の姿は必ずありました。たなびく煙も農作業の証です。

さらに農作業を手伝う子供や、川には魚釣りする子供の姿がありました。

しかし、いけどもいけども車窓から子供の姿を見かけませんでした。

これからの農村のキーワードは「里山」だと言われています。里山の基本は資源循環です。

すなわち、外部からのものの流れをできるだけ押さえて、その中で消費、さらに生産していくことです。そして資源循環はすべて人の動きからもたらされるものです。

里山構想をいうのであれば、まず人の流れを活発にしなければなりません。



5. まず使ってみよう身近な資源、農村は途方もない人的資産の宝庫

昨夜から気温がどんどん下がり今朝は一面の霜でした。

田んぼの畦、畑、空き地で旺盛だった雑草の多くがきつね色に染まるなか、ひときわ緑を濃くしていく植物が彼岸花です。もちろん葉のことですが、花が枯れたあとに葉を出しこれから冬場にかけて伸びていく植物です。

山口盆地にこの彼岸花が多い理由について新説を聞きました。

戦前、この鱗茎(地下の茎)から澱粉をとり、糊を製造していたそうですが、今回聞いたのは別の用途です。先日、流域の環境を考える委員会で隣におられた JA 山口の T 委員から聞いた話です。

この葉を使うと実に良質の堆肥ができるとのことでした。昭和 30 年代の頃まではどこの農家でもつくっていたとのことですが、農業の機械化、化学肥料化によって次第につくられなくなり、刈り取られなくなったものが、この 2、30 年ほどの間に増えて来たのだらうとのことでした。

この地方で、彼岸花の葉のことを”モメラ”というのだそうですが、これを刈って、切り藁、牛舎や馬屋からでる敷き藁、下肥を交互に混ぜ発酵させるのだそうです。JA の方が言われるのだから間違いのないと思いながら聞いていました。

今ではほとんどの農家がコンバインを使うので藁はまず生産されません。また、機械が普及したので、牛や馬を飼う必要もなくなりました。農家でも集落排水設備や化学肥料が普及し下肥を使うことはもうありません。かつて農家で生産されるすべてのものを有効に利用してきたサイクルの輪が何カ所かで完全に切れてしまったのです。

最近では趣味で野菜を作るひとが増えましたし、有機農業ブームです。堆肥を使えば土地はやせないし、良質の野菜ができることは知っていても、みなホームセンターからお金を出して培養土や堆肥を買っているのが現状です。すぐ身の回りにいくらでも堆肥の原料となるものが手にはいるのに、何カ所も輪が切れているのでは、個人レベルでリサイクルを復活させるのはもう無理かも知れません。県庁の会議室から二人で山口盆地を見下ろしながら時の流れを感じました。



みなと山口合同新聞社取締役
山口新聞本部副部長



昭和27年生まれ 山口市出身
食料・環境・ふるさとを考える山口県地球人会議 委員
やまぐち棚田保全協議会 委員
山口県立山口博物館協議会 委員
中国四国管区行政評価局行政苦情救済推進会議 委員

○ パネルディスカッションで考えている発言要旨について

- ① 4月から掲載を始めた連載「農地・水・環境～守ろう地域の手」や、中山間地の現地視察などの感想を通して、高齢化、後継者不足などを背景に疲弊する農村環境の現状を、もっと県民にアピールしていく必要性を記者の目線でお話できればと考えています。農業者だけで農村環境を維持していくのは困難で、農業者以外の地域住民が協力しても、今のままではいずれ集落そのものが崩落しかねません。

新聞情報ですが、英国では都市から農村へ人口が戻る現象が1970年代から始まり、今も続いているそうです。英国人には農村への憧れがある、農村は「こころのふるさと」だからと書いてありました。日本でも、都心に生まれ育った若者たちが農村に移住する動きが活発化し、とりわけ、東日本大震災発生後にその傾向が強まっていると聞いています。

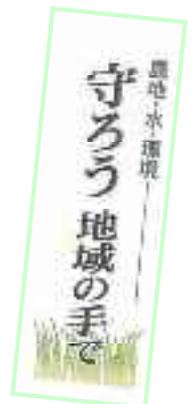
農村、農業への関心が低いといわれる都市住民の多くは、農村の危機を実感として理解していません。新聞連載もそうですが、あらゆる機会をとらえて都市住民に農村の魅力や現状を知らせ、積極的に交流(イベント、農産物直売など)を深めていく必要があります。

- ② 東日本大震災、福島原発事故の発生を背景に、脱原発、太陽光・風力・水力など再生可能エネルギーの導入は時代のすう勢となっています。いずれ地域で必要とするエネルギーは、地域でまかなう時代がくるものと思われます。7月には再生可能エネルギーの普及を目的にした「固定価格買い取り制度」がスタートしましたし、環境も整ってきています。

星野さんの基調講演を踏まえて、**県内でも農村で電気を生産する時代がきている**ことを認識していただけるような話しができればと思っています。

山口新聞 毎週金曜日 第3面に連載中

過疎化・高齢化などを背景に県内の農村を取り巻く環境は様変わりし、農地、農業用水、ため池などの資源を農家だけで守っていくのは困難になっている。こうした中、2007年度にスタートした「農地・水・環境保全向上対策」が支えとなり、山口県内に300を越える活動組織が誕生、地域ぐるみで農村の資源や景観を守る動きが活発となってきた。どんな活動に取り組み、農村地域がどう変わってきているのか――を紹介している。





山口県立大学 看護栄養学部教授 (学生支援部長)



昭和36年生まれ 名古屋市出身
【専門分野】 栄養生化学、食品機能学
【研究テーマ】 山口県産野菜、果実、茶等の食品機能性の研究
やまぐち食の安心・安全推進協議会 会長
山口県食品ロス削減推進協議会 会長

○ 農村集落に元気を取り戻す方法

私は出身が名古屋市でサラリーマン家庭に育ったため、実際に農業を行った経験はありません。山口県立大学に赴任し、山口県の農業を傍観者的に見聞きしての意見ですので、机上の空論になるかもしれませんが、考えを述べさせていただきます。

都会出身者から見ると、農村というのはとても豊かな資源を持っていると感じられます。その土地の人にはごくごく当たり前のつまらないと感じられるものでも、それが無い地域では貴重な資源になる可能性があるということです。そのよい例として、徳島県勝浦郡上勝町の高齢者のみなさんが頑張っている「葉っぱビジネス」が挙げられます。平均年齢 70 歳以上のおばあちゃんたちがパソコンを駆使し、自分の商品である「葉っぱ」を山から集めて販売している会社で、会社としての売上高は 2.6 億円、年収 1000 万を稼ぐ社員(おばあさん)もいるとのこと。

こういった発想というのは、地元の人よりも、「他の地域(都市部)から来た若者」が考え付くことが多いのではないかと思います。若者は世間知らずな分、柔軟でユニークな発想ができるうえに、情報化社会に対応した動きができる人が多い、という特徴があると思います。

今では、田舎であろうが山村であろうが最低限のインターネット環境があれば、都会にいるのと何ら変わらない動きができますし、クロ〇〇ヤマトなどの宅配業者はどんな田舎でも集荷してくれますので、発送もできます。

地域の良さを発見して役に立ちたいという熱意のある人材さえいれば、地域の人を巻き込み、どんどん新しい企画・提案で農山村を豊かにしていくことは可能ではないかと思います。

しかし、なかなか地域に地元の若者が残ったり、よそから移住してきたりはしてくれないのが現状です。そこで提案したいのが、地域の大学との連携です。どの県にも国立大学は1つはありますし、県や市の設置している公立大学もほとどの県にもあります。さらに私立大学もあります。大学には、人は入れ替わるものの必ず18歳から22歳の若者が多数いますし、専門家集団である教員集団や図書館・研究設備などの資源もひかえています。

このような実働部隊付きシンクタンクである大学をいかに地域に巻き込むか(地域に関心を持ってもらうか)、がこれからの農村・山村地域の生き残り策ではないかと思います。

ただし、必ずしも大学の学生や教員が地域のことだけを優先的に考えてくれるわけでもなく、その地域にとってありがたい迷惑な(または本当に迷惑のみな)行為をすることも多々あるでしょう。また、中には悪意を持って近づいてくる大学関係者もあるかもしれません。

しかし、お互いをよく知る機会を持ち、いくぶん月日がかかっても良質な人間関係ができれば、少なくとも地域のごく少数の似通った考え方をを持った集団のみでアイデアを考えるよりは、何か斬新で画期的なことを始められる可能性が見えてくるのではないかと思います。



山口県商工会連合会 専務理事



昭和24年生まれ 山口市出身
平成22年 山口県庁退職
財団法人山口県商工会館 副理事長
公益財団法人やまぐち産業振興財団 理事
山口地方最低賃金審議会 委員

○ 農業・農村に対する私の思い

1 自己紹介

私は、昭和24年、山口市南部に広がる田園地帯である佐山地区に、団塊の世代の一人として生を受け、15歳の年に父が病床に伏したため、その時から現在まで48年間(ほぼ半世紀)にわたり、農業に従事してきました。

当時は、牛や馬などの家畜を使用して耕作していましたが、現在ではトラクターに替わるなど、全ての農作業が機械化され、農業は肉体的には随分便利で楽になりました。

しかしながら、その分だけ多額の資金が必要となり、農業は採算性の悪い業種となってしまいました。農家のほとんどは農業以外の収入がなければ、農業経営は成り立たないものとなっています。

さて、私は、私が住んでいる地域からは東に位置する山口市鑄銭司に建設された山口県セミナーパークの背後に聳える陶ヶ岳から火の山に至る山なみから、朝日が昇るまでの春先の農村風景(景観)は本当に素晴らしいものだと感じており、山口市南部に生まれ育った私としては、この「美しい日本の原風景」とも言える景観を次世代に残していきたいと思うものです。

平安時代の女流作家である清少納言も、明け方の京都東山の景観を、彼女の著書である「枕草子」の第一段に「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎはすこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。」(はをかし)と表現していることは、平安の昔も今も感激する景観に変わりはないのだと思っています。

2 我が家の農業後継者

私は、3人の子供を育てましたが、子供たちそれぞれが中学生になり、一定の体力が備わった頃から農作業の手伝いをさせてきました。

しかしながら、農作業の肉体的な苦しさ・辛さに比べ、米価や野菜の価格は非常に低い(安価)ため、農業収入だけでは子供に高等教育を受けさせるだけの収入を得ることは到底不可能であり、子供たちに対して「我が家の農業を継承せよ。」とは言えなかったのが現実でありました。結果として、それぞれ農業以外の職業に就くこととなり、子供たちが我が家の農業を継承することはありませんでした。

3 農業・農村の役割と機能(理念)

農業は、国民生活にとって最も基礎的なものである食料の安定供給を行うとともに、地域社会の活力の維持、国土や自然環境の保全を通じて、地域経済社会の発展と国民生活の安定に不可欠な役割を果たし、また、農村は、個性豊かな伝統文化を育み、それを継承発展させる空間として重要な機能を担ってきました。

このような農業・農村の持つ大切な役割と多面的機能を、これからも一層発揮させていくことが重要であると考えます。

4 農業・農村を取り巻く課題

農業振興を図る上で最も基本的な課題は、第1に担い手の高齢化が進む一方、後継者の確保が十分でない状況を克服し、地域として農業の継続・発展を図る仕組みを作ること。第2に米作に依存した生産体質から脱却を図る新しい生産対策(米作依存農業から複合農業への転換)を進めること。そして、第3として、これらを円滑に進めるために土地基盤整備を促進することが、最も重要であると思っています。

5 優良農用地の確保

大雨等により農地や農業用施設が被害を被った場合、その復旧のための農地・農業用施設災害復旧事業費は、国費(国の予算)からその50%~65%を負担(補助)する仕組みとなっています。個人の所有する田畑などの個人資産に対して国民の税金を使ってまで復旧する理由は、国民食料の安定供給を図るために優良農用地を確保するという国の政策に基づくものです。

6 農業・農村の活性化に向けた方策

こうした「優良農用地の確保」という国の政策・制度に鑑みると、農地所有者は「農地は未来永劫とも個人々々の財産ではなく、自分が耕作している間の(国からの)預かり物」という観点に立って、農地の基盤整備を進めること、具体的には大区画に圃場を整備して、一定の農地を集積し、生産組織(組合)を設立して持続可能な農業経営を確立することが望ましいし、求められていると考えます。

私の住んでいる地域では、高齢化等により担い手がなくなったために、耕作放棄田が30%以上あるのが実態です。こうした耕作放棄田を有効活用するためにも、圃場整備等の基盤整備が緊急に必要であると考えます。

このことは、国民の主食である米の生産(稲作農業)のためにも重要であり、また農村地域における雇用の創出にもつながるものだと考えます。

地域に雇用の場ができることにより、元気な若者が定住すれば、必然的に農村地域も活性化し、伝統文化の継承なども可能になってくると思います。

加えて、我が国の食料自給率が39%(平成22年度・カロリーベース)と落ち込んでいる現状に鑑みると、国民の主食である米づくり(稲作)はもとより、野菜生産等のためにも、優良農用地(水田・転換畑)の確保を図り、次世代につなぐことが重要であることは言うまでもないことだと思います。

国や地方公共団体におかれては、人口減少とともに少子・高齢化が進む農村地域に、特に中山間地域対策として、持続可能な農業経営のためのハード・ソフト両面からの支援策を強力に講じていただきたいと思っています。

7 終わりに

私は、現在、商工会・商工会連合会という

旧町村部にある「総合経済団体」に籍を置いています。

その立場から意見を申し上げますと、中山間地域で

商工業を営んでいる商工会員と連携して、農業の6次産業化、あるいは農商工連携製品の開発・販売等、トレンドリーな取組も視野に入れていくなど、異業種の人達とも交流・協力して、農業生産を考えていくことも必要であると考えています。

今後とも、私は地域農業・農村の一担い手として、微力ではありますができる範囲で農業と農村地域の活性化のために尽くしていきたいと思っています。



山口県地域消費者団体連絡協議会 前副会長



昭和16年生まれ 山陽小野田市出身
 【専門分野】女性問題 男女共同参画
 山口県特別報酬審議会 委員
 山口県中山間地域特別支払制度審議会 委員
 やまぐち食の安心・安全推進協議会 委員 等 歴任

○ 生産者の皆さん 頑張れ

～私たち山口県地域消費者団体は、地産地消を応援しています！～

昭和59年山口県地域消費者団体連絡協議会は、山口県下の地域消費者団体25団体で結成された。主な活動内容は、消費者被害防止啓発、地球温暖化防止(マイバック、省エネルギー)や食の安心・安全を学習し、地産地消の推進など地域に根ざした消費者活動(生産者との意見交換、現地視察など)を展開している。

このような状況の中、県内各地の現地を視察するとともに取組み状況を学習し、「かわら版」を作成し情報発信してきたところである。

現地視察をかさねた結果、農業だけでなく、集落の維持や活性化への強い想いを聞くことができた。

今後の取組みとしては、情報発信の強化が大切だと思う。

また、都市住民や学生向けの見学、体験、実習の受け入れなど外部との連携が重要と思う。相手を招く、または自分から出向き顔を合わせ話しをする。そうすることで、人と人との関わりができコミュニティも広がり一つの活動の取組にもつながっていくと感じている。

地域住民あるいは消費者の視点から感じること

- ① 消費者の目から見た中山間地域へ農業に対する印象や期待するものについて
 - 安心・安全な農産物の供給の場であるとともに、日々の疲れをいやしてくれる「やすらぎの空間」
- ② 中山間地域直接支払制度によるさまざまな取組について
 - 中山間地域の良さと大切さを広報活動等を通して(かわら版など)伝えていかなければならない。
- ③ 消費者の意識変化の必要性について
 - 交流から協働へ移行すべきである。

